【聖徳太子湯岡碑文】

法興六年（596年）、道後に訪れた聖徳太子は明媚な風光と良質の温泉を推賞され、これを記念するために、湯岡に温泉の碑を建立されたと伝わります。

岡は今の道後公園ともいわれます。

碑は現存しませんが、伊予国風土記逸文に残されています。

（意訳）

思うに、天の日月は平等に光を恵む。神の井（温泉）は誰にでも平等に恩恵を与える。

このような自然の摂理と同じように私心なく政を行うならば、これこそ理想の国、まぼろしの寿国のこの世での姿ではないか。

人々は温泉に入浴して難病を治している。それは寿国にある霊泉花池で沐浴して、弱い人を仏に化すると同じことではなかろうか。

湯の岡に立って伊予の連山を見ていると、このまま山にこもりたい気持ちになってくる。椿の木はおおい重なり、丸い大空のような形をしている。

『法華経』にある五百羅漢が、五百の衣傘をさしているように。朝は鳥が戯れ、あちこちで囀（さえずる）るその鳴き声は、ただただ耳にかしましい。

真紅の椿が葉を集めて照り映え、椿の実は花弁を覆って温泉に垂れさがる。その下を通って遊びたい。

どうして大河や大空の心を知ることができようか。私の誌才はとぼしくて、魏の曹植（そうしょく）のように、七歩歩く間に詩をつくることができずに恥ずかしい。後々の学識人よ、どうかあざわらわないでほしい。

道後温泉別館
飛鳥乃湯泉
法隆古殿主玄妙堂